

# 美しすぎる母

2008(平成20)年4月23日鑑賞<角川映画試写室>

★★★



監督=トム・ケイリン/出演=ジュリアン・ムーア/スティーヴン・ディレイン/エディ・レッドメイン/エレナ・アナヤ/ウナクス・ウガルデ/ヒュー・ダンシー (アスミック・エース配給/2007年スペイン、フランス、アメリカ映画/97分)

……「僕は、母を殺した」。大富豪ベークランド一族では、1972年になぜこんな事件が……？ 悲劇のヒロイン、ジュリアン・ムーアのための映画であることは、原題の『Savage Grace』や、邦題の『美しすぎる母』を見れば明らか！ 不倫と同性愛がテンコ盛りの「華麗なる一族」の愛憎劇は見どころいっぱい。そんな中、彼女の「Savage」ぶりは？ そして「Grace」ぶりは？ 尊属殺人、心神耗弱論の日米対比をしながらの鑑賞も一興かも……？

 『エデンより彼方に』に次ぐ、ヒロイン、ジュリアン・ムーアのための映画が誕生！

『ハンニバル』(01年)で、あの有名なFBI捜査官クラリス・スターリングの役を演じたジュリアン・ムーアは、1961年12月生まれだから既に46歳。しかし、ニコラス・ケイジ主演の『NEXT ネクスト』(07年)ではFBI捜査官役に体当たりしているし、『アイム・ノット・ゼア』(07年)ではシンガーソングライター役など、相変わらず多彩な女優活動を展開中。

しかし、私がみる彼女の代表作は、何といても『エデンより彼方に』(02年)だ。『めぐりあう時間たち』(02年)も良かったが、これはニコール・キッドマンとメリル・ストリープとの共演だから、彼女の存在感は3分の1(『シネマルーム3』88頁参照)。『エデンより彼方に』の評論で私は「ヒロイン、ジュリアン・ムーアのための映画」と書いた(『シネマルーム3』165頁参照)が、今回の『美しすぎる母』を私は再び「ヒロイン、ジュリアン・ムーアのための映画！」と表現したい。

## 邦題と原題、どちらが好き？

『美しすぎる母』という邦題は、よく練られたタイトル。しかし、私の印象では、「だから、何なの？」というアピール力がイマイチ不足……？ これに対して、この映画の原題は『Savage Grace』。つまり『野蛮な優美さ』だ。

私が再び「ヒロイン、ジュリアン・ムーアのための映画！」と書いたのは、貧しい家庭に育ちながら大富豪のベークランド家に嫁いだバーバラ・ベークランドを演ずるジュリアン・ムーアの演技が迫真のものだから。生まれたばかりの赤ん坊に対して無邪気な愛情を示すバーバラ、華やかな社交界でその魅力を存分に見せつけるバーバラ、そんな中にもどこか育ちの悪さを隠せないバーバラ、そして夫ブルックスが離れて行った後、成人した息子に対して盲目的な愛情を注ぐバーバラ。その他、バーバラ役のジュリアン・ムーアがこの映画で見せる、時には粗野でワイルドな力強い感情と時にはエレガントで美しいその姿を表現するには、原題の『野蛮な優美さ』の方がピッタリ。さて、あなたはそんな邦題と原題、どちらが好き……？

## ベークランド家とは？

「僕は、母を殺した」。プレスシートのイントロ冒頭には、そんなショッキングな文字が躍っている。アメリカのベークランド家はプラスチックを発明したことによって大富豪になった「華麗なる一族」。そして、バーバラが3代目当主ブルックス・ベークランド（スティーヴン・ディレイン）に嫁いだのは1942年。バーバラは父親が借金を苦にして自殺したため、貧しい中母親の手によって育てられたが、バーバラの兄も自殺のような謎の死をとげたらしい。つまりバーバラは、そんな貧しい生活とおさらばできる理想的な結婚を、その美貌と才覚によって実現することができたわけだ。

結婚後1946年には、一人息子アントニーも授かり、バーバラは富と名声をバックとして優雅に社交界をわたり歩いていた。そんなベークランド家は順風満帆かと思われたが……？

## 華麗なる一族はバラバラ……？

幸せそうな外観とは裏腹に、夫のブルックスは息子が生まれた直後からそんなバーバラを苦々しく思っていたよう。他方、ベークランド家の4代目を継ぐべきアントニ

ー（エディ・レッドメイン）はハンサムな青年に成長していたが、スクリーン上で観る限り、彼はどことなく陰湿で内気そしていじわるそう……？ 金と地位と名誉があれば、息子は順調に育つ。そんな方程式が成り立たないことは明らかだが、一人息子に愛情を注ぐことしか知らないバーバラが、所詮息子の複雑な感情まで理解できなかったのは仕方のないところ。そして、その頃には夫ブルックスのバーバラに対する愛はとっくに冷めていたようだ。ここでビックリしたのは、1967年に地中海の港町スペインのカダケスで、アントニーがはじめて見つけたガールフレンドのブランカ（エレナ・アナヤ）が、父親と息子を二股にかけた上、父親の方に乗り換えたこと。ここまでくれば、バークランド家はもはやバラバラ……。

## 不倫と同性愛がテンコ盛り！

創業家の2代目は軟弱だが、3代目が盛り返すことがあるのは、徳川3代将軍家光の例をみれば明らか……？ もっとも、源頼朝、頼家に続く3代目実朝は源家をつぶしたとの反論もあるだろうが……。バーバラの夫ブルックスは、その父親つまり2代目当主がビジネス上不利な判断をして一族の財産を減らしたことを軽蔑していたらしい。また、初代の資質を自分が受け継がなかったことに失望していたらしい。そんなブルックスの目からみると、容貌こそ美しいが、陰湿で何ゴトにも意欲を示さない息子アントニーに失望していたのは当然。そんな一族だから、一家バラバラとなつてからは、不倫と同性愛がテンコ盛り！ もっとも、私はブルックスとブランカの不倫や、ブルックスが妻子を捨ててブランカに走った後、バーバラがビジネスパートナーであるサム・グリーン（ヒュー・ダンシー）と肉体関係をもったのは十分理解できるが、同性愛は理解の範囲外。アントニーとその友人ブラック・ジェイク（ウナクス・ウガルデ）との日常的な同性愛関係は見るからに気持ち悪いし、アントニーの相談相手になっていたサムとも肉体関係があったとしたら、そりゃもう論外……？

## 「僕は、母を殺した」のは、なぜ……？

トム・ケイリン監督がジュリアン・ムーアをヒロインに迎え、「僕は、母を殺した」をテーマとして描いたこの映画は、愛憎劇のオンパレード！ バークランド家は一見幸せそうに見えるが、アントニーが生まれた直後、夫婦2人でパーティーに出かけていく様子を見ても、既に2人の気持ちにすれ違いが生じていることは明らか。また、前



© Lace Curtain, Monfort Producciones and Celluloid Dreams Production

述した1967年、地中海の港町スペインのカダケスで夏を過ごす「華麗なる一族」の姿も外見上は幸せそうだが、この時点で既にアントニーは母親にも父親にも反逆しようとしていることは明らか。さらに、ブルックスが完全にバーバラを見捨てた後、バーバラはアントニーと共にニューヨーク、パリ、カダケス、マジ

ヨルカそしてロンドンとさまよっていくわけだが、そこにみる母と息子のベッタリとした姿は何とも異様なもの。少女時代から愛に飢えていたバーバラがその愛をブルックスに求め、最高の愛の形をゲットできたのは大成功だったが、それが崩壊した後は、彼女の愛のターゲットが息子のアントニー1人に注がれたからアントニーは大変。

今年4月11日の東大の入学式では、建築家で特別荣誉教授の安藤忠雄氏が新入生の数を大幅に上回る父母らで埋まった客席を前に、「親離れ、子離れ」の大切さを説いた異例の祝辞が注目されたが、いつの時代でも健全な家族関係のためには親離れ、子離れが必要。ところが、バーバラとアントニーの母子関係は……？

アントニーの裁判において、「僕は、母を殺した」ことの動機がどこまで説明されているのか、またアントニーの心理の奥底に何が潜んでいたのかについてどこまで説明されているのかはわからないが、この映画のテーマは、悲劇のヒロイン、バーバラの「Savage Grace」を楽しみながら、なぜ「僕は、母を殺した」のかを観客の1人1人が考えること。さて、それについてのあなたの考え方は……？

## 尊属殺人罪 日米比較

私が司法試験の勉強をしていた1970～71（昭和45～46）年当時は、尊属殺人の規定が憲法違反かどうかについては合憲説が通説・判例だった（最大判昭和25年10月25日刑集4巻10号2126頁、最大判昭和25年10月11日刑集4巻10号2037頁）が、さてアメリカでは……？ ちなみに、イスラム圏では姦通罪を定める国が多いし、韓国でも

配偶者のある者は男女を問わず姦通罪が適用される。日本では、戦前は夫のある妻と姦通の相手方となった男の双方に成立する姦通罪が存在していたが、戦後1947（昭和22）年10月の刑法改正によってこれが廃止されたことはご承知のとおりだ。

ところが、私が司法試験に受かり、司法修習を受けていた1973年4月に最高裁判所大法廷は尊属殺人罪について違憲判決を言い渡した（最大判昭和48年4月4日刑集27巻3号265頁）。そんな判例の変更を受けて、ついに1995（平成7）年には、尊属殺人を定める刑法200条の規定は削除されるに至った。その根拠は憲法14条1項が定める「法の下での平等」。しかして、アメリカには尊属殺人の規定がないのは当然……。

## 心神耗弱による刑の軽減 日米比較

息子アントニーが母親バーバラをナイフで刺して殺したのは1972（昭和47）年11月17日で、多分アントニーが25歳の時（プレスシートの年表が1973年となっているのは多分まちがい）。映画のラストに表示される字幕やプレスシートにある中央大学法学部教授・犯罪学博士の藤本哲也氏の「事件は何故起こったのか？ バークランド家の実態、事件について」によれば、アントニーは心神耗弱のためごく短い刑とされ、ブロードムアー病院に精神病患者として収容されたとのこと。つまり、アメリカでも心神耗弱による刑の軽減は、当然の法理とされているわけだが、そんな刑罰については当然賛否両論が……？

## アントニーとバークランド家のその後は……？

ところが、プレスシートによればアントニーは1980年7月に釈放されて祖母に引き取られた後、ここで再び祖母を刺したとのこと。幸い祖母は死亡は免れたが、これによって彼はライカーズ島に送られ、皮肉にも、祖父の発明したプラスチックバッグを頭にかぶり自殺したとのことだ。この映画はそんなバークランド家に起きた息子による母親殺し事件を描いて第60回カンヌ国際映画祭を騒然とさせたが、そんな悲劇の連鎖をみると気分は滅入るばかり……？ ちなみに、バークランド家がその後どうなったのかについてこの映画は一切触れていないが、私としてはそこにも興味があるところ……。

2008（平成20）年4月25日記